

傅增湘的古玉研究

——「尊古齋古玉圖錄序」考——

稻 畑 耕 一 郎

一、はじめに

傅增湘はまずは古籍善本の一大收藏家として、またそれらを駆使しての優れた校勘學者として紹介されることが多く、その方面の仕事については私たちの學問領域のなかではよく知られている。その著作『藏園群書經眼錄』『藏園群書題記』『藏園補訂邵亭知見傳本書目』などは、いずれも中國の古典籍を扱う上で基本となる書物である。しかし、傅增湘がそれらの著作で理解されているだけの古文獻學者ではなかったことは、これまでにも傅增湘の埋もれた幾つかの文章や詩作を掘り起こし述べてきたところである。

今回、本稿で取り上げるのは、傅增湘の玉器に関する見識を窺うに足る文章「尊古齋古玉圖錄序」である。原文は、清末から民國年間にかけて北京の琉璃廠で骨董商としてその名を知られた尊古齋が編纂した圖錄『尊古齋古玉圖錄』に收録されている。尊古齋收藏の

古玉に関する圖錄としては、『古玉圖錄初集』という名の圖錄が玉器愛好家や收藏家の間では知られた存在であるのかもしれない。しかし、そこに記された傅增湘の「序」は、玉器研究者においても取り擧げて論じられた形跡はなく、ましてや古文獻學の分野での成果に關わるだけの人にとってはまったく視野に入ってこないもののようにある（『尊古齋古玉圖錄』と『古玉圖錄初集』の關係については後文に述べる）。

このことは、傅增湘の學問の全貌を知るといふ觀點からすると、また何よりも民國期の中國古典學のあり方を理解することから言つて、はなはだ遺憾な狀況にあると私は考えてきた。それは取りも直さず、現代における中國古典學のあり方の反省にも繋がると考えるからである。

二、尊古齋黃伯川の仕事

尊古齋は、清末から民國年間、北京の琉璃廠にあつてその名を知られた骨董店である。店を起こした黄興甫（一八五五年—一九二一年）は、湖北江夏（雲夢）の人、それを繼いで發展させたのが侄（お）の黄濬（一八〇年—一九五二年）で、尊古齋は實質的には黄氏二代の店である。開業は光緒二十三年（一八九七年）、黄濬が店を閉じたのが民國十九年（一九三〇年）であるので、その間わずか三十餘年に過ぎなかったが、數々の傳説とともにこの世界にその名を残した。¹⁾

初代の黄興甫は舉人として光緒二年（一八七六年）の會試に臨んだが、及第できぬまま京師に留まり、東琉璃廠の南に隣接する安瀾營で私塾を開いて骨董商の子弟に經書詩文を教えていた。そのうちに骨董商から學識を見込まれ、やがて自らも店を開いてこの世界に足を踏み入れることとなる。琉璃廠ではいわゆる新派の骨董商となった。

折から紫禁城からは貴重な傳世の書畫古物が多數流出し、また京師の高官や學者の間では金石の學が盛んになると、新出の甲骨片や青銅器・玉器・仏像など、あらゆる古物が全國各地から琉璃廠に集まって来た。それによつて琉璃廠は、空前の活況を呈することとなる。こうした機運の中で、學問見識に商才を兼ね備えた黄興甫の尊

古齋は、貴重な文物を扱う店として名を知られるようになり、呉大澂、王懿榮、孫詒讓ら清末の金石學を語る上では缺かすことのできない高官や學者が足繁く立ち寄る店となった。

一方で、黄興甫には跡繼ぎの子がなかったことから、早くに亡くなった弟の子であつた濬の才覚を見込んで郷里から呼び寄せ、これに四書五經を學ばせ、さらに京師同文館に入れるなどして後繼者として育てた。同文館でドイツ語・英語・フランス語を學ばせたのは、いずれ外國人客をも取り込んだ商賣に展開したいとする考えがあつたからであらう。黄濬もその期待に違わず、同文館で學ぶこと八年、外國語をよく習得し、卒業後はしばらくドイツ系の商社に入つて通譯を務めるが、やがて黄興甫の後を繼いで尊古齋の仕事に従事することになる。宣統二年（一九一〇年）のことである。

黄濬、字は伯川、また百川、字を以て通行した。黄興甫に代わつて黄伯川が經營を任されるようになると、尊古齋の常連客として寶熙、端方、溥心畬、羅振玉、馬衡、郭沫若、于省吾、商承祚らが加わる。孫詒讓の『契文學例』や羅振玉の『殷墟書契』などには、黄氏尊古齋が提供した材料が少なくないと見られる。黄伯川は単に巷間の骨董商というだけでなく、數多くの古物を見ることで養われた眼力と見識には端倪すべからざるものがあつた。

後に『甲骨文字釋林』などを書くことになる古文字學者の于省吾（一八九六年—一九八四年）は、黄伯川が影印出版した『衡齋金石識小錄』に「叙」（民國二十三年、一九三四年）を寄せて「黄君伯

川は賈に隠れ、而して意を刻して古を稽ふること間無し。……余の君を識ること三載、君は一物を得る毎に余に示^{しめ}す。余の論ずる所の者、十に九は君と合す。其の冥思嘿契、高鑑遠識、之に尙^{まさ}る莫し」と賞賛し、信頼を寄せている。⁽³⁾ 黄伯川が一介の骨董商であっただけでなく、殷周秦漢の古銅器の専門家であり、甲骨文や金文についても深い造詣があるという認識は尊古齋に関わりのあつた學者の共通のものであつた。

こうした言辭が序文における過獎の辭でないことは、黄伯川が取り扱つた古物をジャンル別にして丹念に拓本を取つて残した圖録の數々が今によく証明している。その出版は、『尊古齋印存』（民國十六年、一九二七年）と『尊古齋古鈔集林（第一集）』（民國十七年、一九二八年）を除き、大半は伯川が店の經營の第一線から退き、店の名も通古齋と改め、場所も西琉璃廠から東琉璃廠に移して子の金鑑（字は鏡涵）と弟子の喬振興（字は友声）に委ねた民國十九年（一九三〇年）以降の仕事である。⁽⁴⁾

黄伯川が刊行した圖録の書名は、現物の存在を確認できたものだけに限つて挙げてみても、次に示すような多數に上る。⁽⁵⁾ それぞれが分冊になつてゐることからすると、優に百巻を超えるものと思われる（原鈐本、原拓本は後半において、所藏先を明記した）。

尊古齋刊行書目

・『尊古齋古鈔集林』 第一集 卷一～卷六 民國十七年 題字…

傅增湘の古玉研究

羅振玉 序文…柯昌泗（「戊辰三月下旬」「一九二八年」）原鈐本 のち民國二十二年石印⁽⁶⁾

・『衡齋藏見古玉圖』 二卷 民國二十四年二月初版 コロタイプ版 題字…袁勵準 序文…孫壯（甲戌「一九三四年」）コロタイプ版

・『衡齋金石識小錄』 二卷 民國二十四年二月初版 題字…孫壯 題字（甲戌十二月「一九三四年」）于省吾序文（甲戌仲冬）目次…孫壯 コロタイプ版 のち『石刻史料新編』（第三輯 40「研究參考類」、新文豐出版公司、一九八六年七月）所収

・『鄴中片羽初集』 二卷 民國二十四年二月初版 題字…袁勵準（甲戌年冬月）序文…柯昌泗（甲戌六月）コロタイプ版 のち國家圖書館出版社輯『地方金石志彙編（地方專志叢刊）』第五十六冊（國家圖書館出版社、二〇一一年六月）所収

・『尊古齋所見吉金圖』 四卷 民國二十五年四月 題字…馬衡 序文…于省吾（「民國二十五年一月」）コロタイプ版 のち台灣國風出版社から影印出版（一九七六年十月）

・『尊古齋陶佛留真』 不分卷 一冊一函 民國二十六年五月初版 題簽…馬衡 題字…袁勵準 序文…馮汝珩 コロタイプ版 のち上海古籍出版社から縮刷影印版が出版（一九九〇年八月）

・『鄴中片羽二集』 二卷 民國二十六年八月初版 題字…袁勵準 序文…于省吾（「丁丑二月」）コロタイプ版 のち國家圖書

館出版社輯『地方金石志彙編（地方專志叢刊）』第五十七冊
（國家圖書館出版社、二〇一一年六月）所收

・『尊古齋古鏡集林』第二集（六冊）民國二十六年七月初版 題
字…羅振玉 序文…于省吾（「民國二十六年五月」）石印

・『古玉圖錄初集』四卷補遺三葉 民國二十八年一月初版 題
字…容庚 序文…傅增湘（「共和二十四年嘉平月」）コロタ

イプ版 のち廣雅社（香港）から影印出版（一九八七年七月）
・『鄴中片羽三集』二卷 民國三十一年一月初版 題字…袁勵準
序文…于省吾（「民國三十一年三月」）コロタイプ版 のち

國家圖書館出版社輯『地方金石志彙編（地方專志叢刊）』第
五十七冊（國家圖書館出版社、二〇一一年六月）所収

・『衡齋藏印』二卷 帙題簽…書皮題簽…孫壯（丁丑春初「一九
三七年」）題字…馬衡（「廿四年五月」）序文…孫壯（「丙子
新秋」「一九三六年」）刊年不詳 コロタイプ版 清華大學美
術館圖書館藏

*『尊古齋印存』六卷六十冊 題字…柯劭忞 序文…柯昌泗（「丁
卯重秋」、馮汝珩「丁卯冬十月」「一九二七年」）中國國家圖
書館藏

*『尊古齋古玉圖錄』不分卷 六冊一函 題簽…志青（馮如玠）
（甲戌中秋「一九三四年」）題字…容庚 序文…傅增湘（「共和
二十四年嘉平月」）清華大學圖書館藏 のち上海古籍出版社
から縮刷影印版として出版（一九九〇年六月）

*『尊古齋古代瓦當文字』不分卷 五冊一函 題簽…志青（馮如
玠）（甲戌秋八月）「一九三四年」清華大學圖書館藏 のち

上海古籍出版社から縮刷影印版として出版（一九九〇年六月）
*『尊古齋造像集拓』一冊一函 題簽…馮如玠？ 題字…馮如玠
清華大學圖書館藏 のち上海古籍出版社から縮刷影印版とし

て出版（一九九〇年六月）

*『尊古齋金石集』四冊一函 清華大學圖書館藏 のち上海古蹟
出版社から縮刷影印版として出版（一九九〇年六月）

*『尊古齋歷代古鏡集影』不分卷 五冊一函 題簽…無署名 清
華大學圖書館藏 のち上海古籍出版社から縮刷影印版が出版
（一九九〇年六月）

*『尊古齋古兵精拓』不分卷 四冊一函 題簽…羅振玉 清華大
學圖書館藏 のち上海古籍出版社から縮刷影印版として出版
（一九九〇年六月）

*『續衡齋藏印』二卷 十四冊 題簽…容庚 題字…容庚 序
文…于省吾（「民國三十三年一月」）清華大學美術館圖書館藏

これらに收録された器影や印影には確かに重複するところもある
が、各圖録を一葉ごとに繙いていくとまことに驚くべき質量の収集
であったことがわかる。またそればかりでなく、原鈐本や原拓本は
もとより、コロタイプ版や石印で出版されたこれらの圖録は印刷が
鮮明にして美しいことにおいて群を抜いている。黄伯川がどれほど

細心の注意を払ってこの原鈐・原拓を取り、さらに墨や紙を精選して精巧無比な印刷に付したかがよく傳わってくる。黃伯川の文物に対する思いの込もった圖録であり、決して通り一遍のいわゆる「坊刊本」の類ではなかった。そもそもうした圖録を出すことは、琉璃廠の骨董商では前例のないことであり、^⑦黃伯川の見識と器量を窺うに足る事業である。

そこで、尊古齋の刊行した圖録は刊行當初からたいへん重寶された。たとえば、出版當時のこととして、後に社会科学院考古研究所の所長となる夏鼐は、その日記『夏鼐日記』（華東師範大學出版社、二〇一一年八月）卷一の一九三五年四月六日の条に、次のような記述を残している。

徐中舒先生來參觀，帶了一部《鄴中片羽》，是北平古董客黃濬編印的安陽出土文物，與此工作地所出的差不多。

夏鼐は當時清華大學の歴史系を出たばかりで、中央研究院歷史語言研究所による安陽の第十五次發掘調査での現場實習に來ていた。

徐中舒は研究所の研究員で、發掘の総責任者であった董作賓とともに現場の視察に來たのである。尊古齋が『鄴中片羽』第一集を出したのは右の「出版目錄」に示したように一九三五年二月であるので、徐中舒は出たばかりの圖録を手にして安陽の現場にやってきたわけであり、實習生の夏鼐がそれを目にして驚いたのも無理はない。そ

れまでの圖録とは全く異なる次元の圖録になっていた。

徐中舒はその圖録を片手に發掘現場を見て回ると、北平に戻ってすぐに「殷代銅器足徵說兼論『鄴中片羽』」という論文を書き上げ（文末に「廿四・四・二十」の記年がある）、燕京大學考古學社の『考古學社社刊』第二期に發表した。その中では「在歷史語言研究所殷代陵墓發掘報告未出版以前，此書要爲研究殷代銅器中最重要之資料，不當以其非科學的發掘而忽之」と述べて『鄴中片羽』に取り挙げられた青銅器の資料価値を高く評価している。さらに「特筆敘述」すべきこととして、この書の巻上の「三十四頁、三十五頁」に見える殷代の璽印の掲載を挙げている。それまでの學界の常識では璽印は春秋戰國時代に新たに起こったものと漫然と考えられていたからである。^⑧それを殷代にまで溯ることを示した書影は衝撃的であつたろうし、學術史上でも貴重な圖録として今もその価値を有している。

その時代からさらに七十數年の時を経て書かれた朱鳳瀚『中國青銅器綜論』（上海古籍出版社、二〇〇九年十二月）の「通論・第二章・青銅器的發見與研究史」は、一九四九年以前の成果に触れたなかで次のように記している。

此書（『鄴中片羽』）刊載了經其手出售的殷墟青銅器及甲骨等遺物編輯而成，三集共收青銅器一三三件，附銘文拓片本，但器物不記尺寸。除上卷所著蟠螭鐘非殷器亦不出于殷墟外，其餘皆可信爲殷墟出土器，對於研究殷墟青銅器有重要價值。

この間に中國青銅器の研究に大きな進展があったことはここで敢えて言うまでもないが、その中で民間の骨董商が扱ったものとしては、この黃氏尊古齋の『鄴中片羽』と『尊古齋所見吉金圖』の二書だけを取り擧げて、その研究史上の価値を認めている。

さらにまた、別の視点から、そうした尊古齋の収集の凄さを確認できる材料がある。二〇一五年十月、香港で中國嘉德（香港）によるオークションが開かれ、そこに「殷墟三期」のものとされる「乙戈簋」が出品された。これは『鄴中片羽』第三集巻上の第二十七葉に「乙戈彝」として収録されているものであるが、そのオークションのカタログにたいへん興味深い「『鄴中片羽』所錄殷墟所出青銅器概述」という一文がある。⁽⁹⁾あまり目に触れることのないカタログの文章であるので、参考資料としてここに引用しておく。

『鄴中片羽』著錄之器，因公認皆爲殷墟所出，學術地位重要，故歷來備受世界各大博物館之重視。據不完全統計，其著錄132件殷墟銅器中至少已有103件入藏中外19家博物館。

其中，中國65件，分別爲…北京故宮32件，上海博物館8件，臺北故宮7件，國家博物館6件，遼寧省博物館3件，旅順市博物館3件，清華大學圖書館3件，首都博物館1件，河南安陽博物館1件，北京大學賽克勒博物館1件。

歐洲24件，分別爲…大英博物館8件，科隆東亞藝術博物館6

件，斯德哥爾摩遠東古物館5件，斯圖加特林登博物館3件，劍橋大學菲茨威廉博物館2件。

美國14件，分別爲…紐約大都會博物館4件，堪薩斯納爾遜美術陳列館4件，舊金山亞洲藝術博物館3件，哈佛大學福格美術館3件。

此外僅餘29器，其間或有已入館藏而未統計到者，亦或有散佚者，目前可知私藏寥寥，遇之當屬有緣。

ここに擧げられた内外の收藏機關とその點數だけを見ても（おそらくこの數字に大きな間違いはないであろう）、『鄴中片羽』全三集がどれほどの圖錄であったかが十分に理解できるのではないか。にわかには信じがたいほどの内容である。しかも、こうした評価はただ『鄴中片羽』に限ったことではなく、尊古齋が出版した他の圖錄についても同じように指摘できる。

民間に回った古物を賣買することは尊古齋の生業であるものの、黃伯川が外國語に堪能であったこともあり、時に文物の海外への流出に加擔したように言われることもあったようであるが、境域を問わず、物はいずれもそれを求めるところに落ち着くのを常とする。従ってそれに先立ってその拓本や印影を整理して出版した仕事は、それが販売のためのカタログであったにせよ、その當時はもちろん、今も、學者たちの研究にも大いに役立つものとなった。⁽¹²⁾

そのことを理解した學者たちは尊古齋の出版物にしばしば題字・

題箋や序文を寄せた。いま確認できたものだけでも、前掲の「出版目録」に付記したように羅振玉、于省吾、容庚、馬衡、袁勵準、傅增湘、馮如玠、柯劭忞、柯昌泗、孫壯らがいる。真贋の入り混じるかもしれない骨董商の圖録に題字・題箋や序文を寄せることは、時として學者の真の見識や力量を問われることにもなりかねないが、彼らは黃伯川の見識によって收藏された物を目睹し、彼と交りをもつことによって実物を「觀摩」する絶好の機会を得て自らの學問研究を進めていった。新しい金石學や甲骨學の前線がそのようにして切り開かれてきた「史実」はほとんど表には出ないが、當時の状況をよく考えてみれば、すぐに理解できることである。⁽¹³⁾この種の學問研究は現物を手にすることなく進めることは不可能であつたからである。

二、傅增湘「尊古齋古玉圖錄序」の原文と訓読

尊古齋は、青銅器・玉器を得意とする店であつたが、古物に關心のあるものであれば當時誰もが知る琉璃廠の氣鋭の店であり、方や傅增湘は古書收藏の大家であり、兩者が相知らないはずはなかつた。尊古齋に立ち寄る學者の中で、文字金石に關する容庚・于省吾、印璽における柯昌泗・孫壯らと同様に、傅增湘が玉器に關しても深い見識を持っていると判斷して序文を依頼し、傅增湘の方でもその圖録の価値を認めたことから執筆を引き受けたのであらう。そのこと

は、以下の序文を見るとよく理解できる。この序文からは確かに傅增湘が玉器に關して並々ならぬ造詣を持っていたことがよく傳わってくる。以下にまず全文を段を分けて掲げ、句讀を施し、參考としてその訓讀を示す。⁽¹⁴⁾

【原文】

昔管子稱玉有九德，宣聖亦謂玉溫潤縝密，比之君子。故觀《周官》天府所司，《考工記》玉人所掌，與夫《爾雅》、《玉藻》之遺文，知古人用以昭瑞命、辨等威、隆享祀、制禮樂，外而盟聘軍旅之彰施，近及服飾儀容之綴附，罔不取資於玉，勒諸典章，蓋視此爲國家之重器，非徒侈華采、矜玩好而已。

夫以玉之爲用至宏，而傳於今者足貴，意必有人焉集其大成，使圭璧與鼎彝，同焜燿於冊府。顧嘗歷覽載籍說玉之書，自宋之呂大防、龍大淵，元之朱德潤，明之楊慎外，絕罕流傳。然呂氏所作，增載於《考古圖》。楊氏所作，祇稱爲《玉名詁》。體非專述，無待評論。龍、朱兩編，繁簡各異，而遺議滋多，其書不爲世重。迄於近代，瞿中溶著有《奕載堂圖錄》，遺稿久湮，前歲始得瑞安楊君爲之授梓，其詮述視宋元諸人差爲典覈。

惟憲齋崛起，久負大名，既具通雅之才，兼據崇高之地，十圭六瑞，獨詡鑒裁，舉其論定諸品，撰爲《圖考》二卷，蒐采鴻富，辨訂翔實，自謂足以雄視百代。然余披尋終始，其闡發固已無遺，而紕漏時復不免，如謂璫爲冒飾，韞以鈎弦，以琥爲發兵之瑞玉，

璿璣爲渾天之機輪，頗難自完其說。蓋援文挾義，備極淹通，而取類定名，不無緣傳。以此知攷古之難，非多識博聞，未足於斯道也。

友人黃君伯川，癖古嗜學，近者取生平所獲古玉，自三代禮器與秦漢法物，凡數百年，躬自摹拓，都爲一編，將出以問世，而徵序於余。余維伯川，幼習象韉之學，慨然思有爲於世，遭時喪亂，抑不得申，乃隱於燕市，耽翫金石，與古爲徒者二十餘年。聞見既博，造詣日深，寓於目者，咸識於心。因以通貫文字之源流，制作之軌則，清裁妙解，有薛尚功、畢良史之風。朋輩治古學者，恒樂相就，以研求異同得失，君亦傾懷輪寫不少愆。茲更輯此玉譜，以供人士訂證之資。斯洵捃古之鴻著，樂善之雅懷矣。余嘗歎有清一代學術昌明，考訂名物之風，至乾嘉而極盛，顧獨於考玉未有專書。推原其故，由嗜古者惟鑑賞是求，治學者爲耳目所囿，其相違失久矣。今君所輯，不啻通其域而置之郵焉。其爲功於學術，顧不大哉。

綜而論之，其善有三。自昔寶瑞之物，恒不世出，兼以山川間阻，易致沉埋。君際辛壬鼎革之後，又值時世遷轉，文軌大同，遠近瑰奇，不脛而走，集於五都之市。君更遣使四出，懸金以求。凡燕齊河洛之賈客，荒垌古塹之耕氓，偶有創獲，不數日已羅而致之几案。今錄中絕類離群之物，皆君精思毅略，披揀而來。此收羅之富不可及者一也。

昔賢著書，類騁奇博，以致真僞雜糅。君經眼既多，抉擇尤謹。

凡於形製、色澤、尺度、周徑、瑯瑑、文藻，手摩目驗，決其時代先後，以推知爲何朝何地所遺。伯樂一過冀野，無留良焉。故登錄之品，率精審可信，視朱譜爲豐博，而較龍譜則精嚴。此選擇之慎不可及者二也。

龍氏所圖，率多濫惡。序跋人代，多有抵牾。其書疑出臆造，則器爲贗鼎，自不待言。奕載堂所錄，訓釋爲詳，而有說無圖，苦難冥索，惟奇器間附原形，第雕鏤簡率，頗不耐觀。憲齋製圖，特爲工雅，惟限於篇幅，乃減縮尺度以就之，且刻畫雖精，圍廓存而神采失，無由窺藝術之美。今錄中諸圖，咸由原器影拓而出，不獨刀削文鏤之法可按而知，即剝蝕斷裂之痕亦存其舊。瑰形殊製，湧溢於楮墨間，無毫釐之或爽，此拓印之精不可及者三也。

綜此衆美，以成鉅編，舉千百年賢聖之精神，閎藏於深山厚土之中者，一旦出塵霾而輝日月，似彼蒼隱啓其機緘，留待後人之闡發，而君適承其運會，以完此千秋不朽之著作，寧非幸哉。顧或謂形模之外，不著標題，且叙釋之辭，亦缺焉未舉，來者將何取資？不知此正君矜慎之至，非故示人以疏略也。方今披山通道，靈奇盡洩，積年疊月，蘊藏方迭出而靡窮。與其臆斷以滋聚訟之端，曷若闕疑以俟方聞之士，故臚陳於冊，各以類從。若夫舊說之未安，或新名之待定，紬經繹史，討索正閎，世有木夫、憲齋其人者，將濡毫削簡以從其後。斯固君禱祀以求，余雖衰老，亦將日夕引領而望之矣。

共和二十四年嘉平月，江安傅增湘序。

〔訓讀〕

昔、管子は玉に九德有りと稱し、宣聖も亦た玉は溫潤にして縝密、之を君子に比ふと謂ふ。故に『周官』の「天府」の司る所、「考工記」の玉人の掌る所と、夫の『爾雅』・「玉藻」の遺文とを觀るに、古人は用いて瑞命を昭らかにし、等威を辨じ、享祀を隆んにし、禮樂を制し、外には盟聘軍旅の彰施、近くは服飾儀容の綴附に及び、資を玉に取らざる罔きを知る。諸を典章に勒むは、蓋し此れを視るに國家の重器と爲し、徒らに華采を侈り、玩好を矜るのみに非ざるればなり。

夫れ玉の用爲るの至宏を以て、今に傳はる者は貴ぶに足る。意ふに必ず人の焉に有りて其の大成を集め、圭璧をして鼎彝と、共に冊府に焜燿とす。顧みて嘗て載籍を歴覽するに、玉を説くの書、宋の呂大防、龍大淵、元の朱德潤、明の楊慎自り外、絶えて流傳するもの罕し。然して呂氏の作す所は、『考古圖』に増載し、楊氏の作す所は、祇だ稱は『玉名詁』と爲すも、體は專述に非ず、評論に待する無し。龍・朱の兩編「龍大淵『宋淳熙敕編古玉圖譜』、朱德潤『古玉圖考』ほか」は、繁簡各おの異なりて、議を遺すこと滋ます多く、其の書は世の重きと爲らず。近代に迄びて、瞿中溶の著に『奕載堂圖錄』有るも、遺稿は久しく湮れ、前歲始めて瑞安の楊君之が爲に授梓するを得たり。其の詮述は、宋元の諸人に視ぶれば、差や典覈爲り。

惟れ愈齋崛起し、久しく大名を負い、既に通雅の才を具え、

兼ねて崇高の地に據り、十圭六瑞、獨り鑒裁を詔り、其の論を擧げ諸品を定め、撰して『圖考』二卷と爲す。蒐采は鴻富にして、辨訂は翔實、自ら謂ふ以て百代を雄視するに足る、と。然れども余披きて終始を尋ぬるに、其の闡發固より已に遺す無きも、紕漏時に復た免れず、璆を謂ひて冒飾と爲し、韞は以て弦を鈎け、琥を以て兵を發するの瑞玉と爲し、璫璣は渾天の機輪と爲すが如きは、頗る其の説を自ら完うし難し。蓋し文を援きて義を抉り、備極淹通し、類を取りて名を定め、緣傳すること無からず。此を以て古を攷ふるの難きを知るは、多識博聞に非ざれば、未だ斯の道に足らざるなり。

友人黃君伯川、古に癖し學を嗜み、近者生平獲る所の古玉を取り、三代の禮器自り秦漢の法物、凡そ數百年、躬自ら摹拓し、都て一編と爲し、將に出して以て世に問はんととして、序を余に徵む。余が維れ伯川、幼にして象韉の學を習い、慨然として思ひ世に爲すこと有らんとするも、時の喪亂に遭ひ、抑へられて申ぶるを得ず、乃ち燕市に隱れ、金石を耽翫し、古と徒と爲ること二十餘年、聞見既に博く、造詣日に深く、目に寓する者は、咸な心に識す。因りて以て文字の源流、制作の軌則を通貫し、清裁にして妙解、薛尚功、畢良史の風有り。朋輩の古學を治むる者、恒に相ひ就くを樂しみ、以て異同得失を研求す。君も亦た懷を傾けて輪寫して少しも悞まず。茲に更に此の玉譜を輯め、以て人士の訂證の資に供す。斯れ洵に古を括うの鴻著、善を樂

しむの雅懷なり。

余嘗て歎ず有清一代、學術昌明にして、名物を考訂するの風、乾嘉に至りて極めて盛なるも、獨だ玉を考うるに於いて未だ專書有らざるを顧みて、其の故を推原するに、古を嗜む者は惟だ鑑賞是れ求め、學を治むる者は耳目の囿とする所と爲るに由り、其の相ひ違失すること久し。今、君の輯むる所は、實だ其の域に通じて、之を郵に置くあらず。其の功を爲すこと學術に於いて、顧みて大ならざるか。

綜じて之を論するに、其の善なること三有り。昔自り寶瑞の物、恒には世に出ず、兼ねて山川を以て間阻せられ、沉埋を致き易し。君は辛壬鼎革の後に際し、又た時世の遷轉に值たり、文軌大同にして、遠近の瑰奇、脛なくして走り、五都の市に集まる。君は更に使を遣やりて四出しせしめ、金を懸けて以て求む。凡そ燕齊河洛の賈客、荒垌古塹の耕氓、偶たま創獲有れば、數日ならずして已に羅して之を几案に致す。今録中の絶類離群の物は、皆な君の精思毅略もて、披揀して來たる。此れ收羅の富、及ぶ可からざるの一なり。

昔賢の著書は、類ね奇博を騁せ、以て真偽雜糅を致す。君の經眼するもの既に多く、抉擇尤も謹なり。凡そ形製、色澤、尺度、周徑、琬琰、文藻に於て、手もて摩し目もて驗し、其の時代の先後を決し、以て何朝の何地に遺されし所爲るかを推知す。伯樂一たび冀の野を過れば、良を留むる無し。故に登録の品、

率ね精審信ず可し、朱譜に視ぶれば豊にして博爲りて、龍譜に較ぶれば則ち精にして嚴なり。此れ選擇の慎、及ぶ可からざるの二なり。

龍氏の圖く所は、率ね多くは濫惡にして、序跋の人、代りて多く抵牾する有り。其の書疑らくは臆造に出づれば、則ち器は贗鼎爲ること、自ら言を待たず。『奕載堂』の録する所は、訓釋は詳爲りて、説有るも圖無く、苦だ冥索し難し。惟れ奇器の間に原形を増し、第だ雕鏤は簡率にして、頗る觀るに耐えず。憲齋は圖を製すること、特に工雅爲り、惟だ篇幅に限られ、乃ち尺度を減縮して以て之に就き、且つ刻畫は精なりと雖ども、圍廓存して神采失ひ、藝術の美を窺うに由し無し。今録中の諸圖、咸な原器由り影拓して出す。獨だ刀削文鏤の法のみならず、按じて知る可し、即ち剝蝕斷裂の痕、亦た其の舊を存す。瑰形製を殊にし、楮墨の間に湧溢し、毫釐の或爽「乱れ」も無し。此れ拓印の精、及ぶ可からざるの三なり。

此の衆美を綜し、以て鉅編と成し、千百年の賢聖の精神を擧げ、深山厚土の中に閼藏する者、一旦塵籟を出でて日月を輝かすは、彼の蒼隱の其の機械を啓くに似たり、留りて後人の闡發を待つ。而して君は適ま其の運會を承け、以て此の千秋不朽の著作を完うするは、寧ろ幸ひに非ざるか。顧みて或ひとは形模の外、標題を著さず、且つ叙釋の辭、亦た焉を缺きて未だ擧げざれば、來者は何を將て資を取らんと謂ふ。知らず、此れ正に

君の矜慎の至りにして、故に人に示すに疏略を以てするに非ざるなり。方今、山を披き道を通じ、靈奇は盡く洩れ、年を積ね月を疊ね、蘊藏は方に迭出して窮まる靡く、其の臆斷、以て聚訟の端を滋す與りは、曷ぞ疑を闕き以て方聞の士を埃つに若かん。故に冊に臚陳し、各おの類を以て従ふ。若夫れ舊説の未だ安からざる、或ひは新名の定を待つが若きは、經を紬き史を繹ね、正閔を討索するに、世に木夫、憲齋其の人あるも、將に毫を濡らし簡を削り、以て其の後に従はんとす。斯れ固より君の禱祀して以て求むるなり。余は衰老と雖も、亦た將に日夕に領を引きて之を望む。

共和二十四年嘉平の月、江安傅增湘序。

三、傅增湘と古玉研究

傅增湘は、序文の冒頭において、玉器が単に身を飾るためのものではなく、「國家の重器」として古代から重視されてきた傳統を述べることから始める。繼いで宋元以來、明清に至るまでの古玉の先行研究に触れて、その足らざるところを指摘する。そこで取り上げられているのは、宋の呂大臨・呂大防『考古圖』、龍大淵『古玉圖譜』、元の朱德潤『古玉圖考』、明の楊慎『玉名詁』、さらに清の瞿中溶『奕載堂古玉圖錄』、吳大澂『古玉圖考』である。これらは総じて玉器に対して「多識博聞」でないことが、不十分な結果を招いていると

指摘する。

これに対し、黃伯川の『圖錄』がこれらに比していかに周到であるかを述べる。それに先立ち黃伯川の學問と見識の博く深いことについて触れ、「多識博聞」の基礎として伯川が「象輶の學」(外國語)を學んだこと、また現物をよく見ていることに言及し、南宋紹興年間の薛尚功と畢良史に擬えている。薛尚功は『歷代鐘鼎彝器款識法帖』において數百點の殷周以來の金石の銘文を模寫して著録し、呂氏の『考古圖』や王黼の『宣和博古圖』の基礎となったものとされる。また同時期の畢良史も進士でありながら、名家に出入りして骨董を売り買いし、「畢償賣」「畢骨董」という外号を得、ついには真贋の鑑定で高宗の覚え宜しきを得た人物である。⁽¹⁵⁾黃伯川を評するに、この二人の事績を踏まえて謂うのはまことにふさわしく、巧ま⁽¹⁶⁾ずして二人の名を擧げるのは、傅增湘の玉に対する深い造詣をも示唆している。

それでは、具體的に黃伯川の『尊古齋古玉圖錄』の優れた點はどこにあったのか。傅增湘が列擧するのは「收羅の富」「選擇の慎」「拓印の精」の三點で、これまたいへん適確な指摘である。

「收羅の富」は主に全國各地から收集したことをいっているが、それだけでなく、『圖錄』には何の説明もないが、新石器時代以降、殷周秦漢の傳世品や出土品が見える。注目されるのは、現在の知識からは黃河中流域の龍山文化や長江中流域の石家河文化、下流域の良渚文化のものと認められる特徴的な玉器の拓本があることである。⁽¹⁶⁾

『尊古齋古玉圖錄』編集の當時はこれらの文化について學界にも當然のことながら何の知識もなかった。こうしたものを排除せずに、価値ある「古玉」と認めて圖錄に收録した見識は高く評価できよう。良渚の玉器は圖像が刻まれている背面には「乾隆庚寅」(乾隆三十五年、一七七〇年)の紀年のある詩が刻まれており、傳世品の中にもすでに良渚玉器が出回っていたことを示す資料として貴重な記録である。むろん收録した玉器に贋作が混じっていないということは保証できないが、當時はまだ贋作や模造品も少なく、「選擇の慎」はかなり徹底しているように見える。

玉器の真贋は確かに見分けがたいものの、印刷の精巧さから、一定程度は後世の判斷を待つことができるほどの「拓印の精」である。¹⁸ まず拓本を取る技術に優れ、印刷にあつては、紙をよく選び、石印であれ、コロタイプであれ、精を極めていく。これと比べると、前代までのものはおまかなイメージを示意する圖でしかない。その後カラー印刷されたものも経年變化で退色していることを思うと、それと比べても格段の鮮明さがある。これが、尊古齋の各種圖錄を今も學術的価値あるものとしている所以である。こうしたことから、この圖錄を以て傳增湘が「千秋不朽の著作」と賞しているのも、あながち溢美の辭ではないと理解できる。

傳增湘のこの序文は短文ながら要を得た玉器研究史ともなっている。名物學の隆盛を極めた乾隆嘉慶の時代でさえ、玉器については愛玩と鑑賞に留まり、研究にまで進まなかったという指摘は確かに

そのとおりであろう。そうした玉器研究史の要點を捕らえたうえで、『尊古齋古玉圖錄』の優れた點を論述しているのは、たいへん周到であり、傳增湘の玉器に關する端倪すべからざる見識を窺うことができる。

傳增湘にはこの文章以外に玉器に關する文章はないと思うが、常に關心の在り処であつたことは確かであろう。そうでなければこれほど要を得た文章は書けなかつたはずである。おそらくはそのようなことがあつて、長子傳忠謨(一九〇五年—一九七四年)は玉器の收藏家となり、専門の著作『古玉精英』(台灣中華書局、一九八九年十一月)、『古玉掇英』(中華書局、一九九五年)を出している。その中には傳增湘が收集して身邊に置いていたものが含まれていなかったかどうか。

先に引いた夏鼐の『日記』(卷九)には、一九八一年三月二十四日のこととして、次のような記述がある。

上午赴所「考古研究所」，偕同徐莘芳同志前往車公庄傳熹年同志家，參觀其收藏的玉器約千零几件，乃其父傳忠謨所搜集，抄家后最近才發還。有北京黃百川(濬)尊古齋及天津吳桐淵原藏物，大部分爲陸續購入者。一直看到十二時餘，才告辭返家。

傳熹年は傳忠謨の長子、すなわち傳增湘の嫡孫にあたり、中國古建築研究の學者であり、中國工程院の院士である。また古籍の専門

家としてもよく知られ、傅増湘の著作の整理はすべてその手にかかる。その自宅がプロレタリア文化大革命の時期に「抄家」（家宅捜査と家産の没収）を受け、そのうちの「玉器約千零几件」が、この年によりやく返却され、それを考古研究所の所長であった夏鼐が徐莘芳とともに確認に行ったというのである。その「約千零几件」に及ぶ玉器を元にして書かれたのが、上に述べた二書であるが、その収集が傅忠諫一代においてなされたものであったのかどうか、傅増湘が関わったものはなかったのかどうか。その大部分が、言われるように尊古齋と天津の呉桐淵（商号は万玉楼）から「陸續購入」したものであったとすれば、尊古齋が店を畳んだのは、民國十九年（一九三〇年）であり、このころ傅忠諫は二十五歳に過ぎず、どれほどの古玉を収集できていたのか定かでない。それだけでなく、そもそも傅増湘が身辺に一點の玉器の收藏なくして、ただ書物を繕うだけで上記の簡明にして周到な序文を書けたと考えるほうが現実離れしているのではないか。傅増湘は古書善本だけでなく、相応の古玉の収集があつたと私は考えている。

四、『尊古齋古玉圖錄』と『古玉圖錄初集』

さて、最後に傅増湘の序文が『尊古齋古玉圖錄』に寄せられたものか、『古玉圖錄初集』のために書かれたものであったかという問題について述べておきたい。

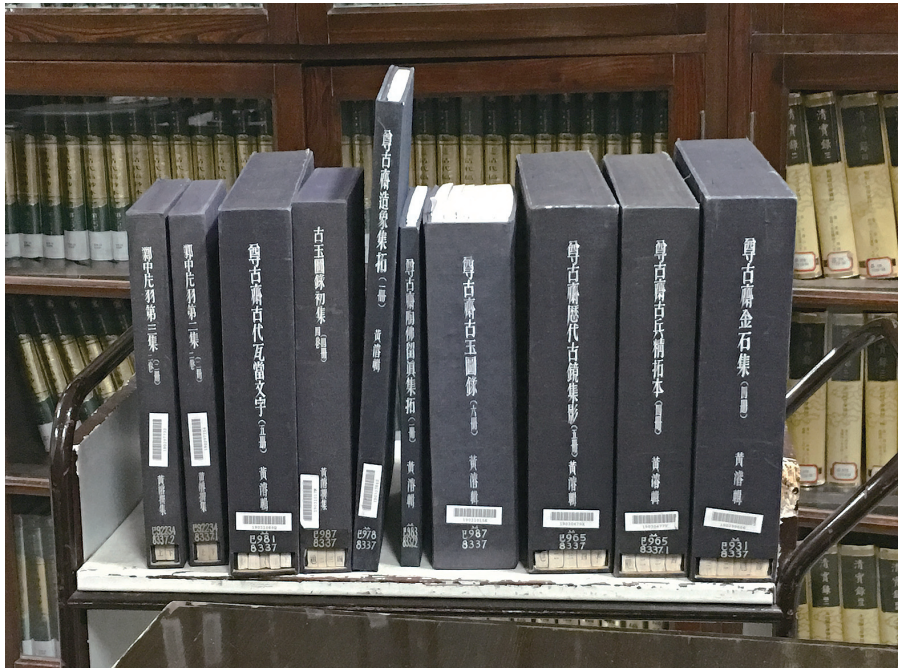
『尊古齋古玉圖錄』に類似の書物として『古玉圖錄初集』四巻がある。『古玉圖錄初集』は「民國二十八年一月」にコロタイプ版として出版されたものであり、古玉愛好家の間ではこの書物が尊古齋の古玉の圖錄として流通してきた。

一方、『尊古齋古玉圖錄』は、民國年間に出版された形跡がなく、ただ清華大學圖書館に「原拓稿本」として残されているだけであつた⁽¹⁹⁾「圖版一」。これを一九九〇年に上海古籍出版社が「尊古齋集拓」シリーズの一冊として影印出版して以來、『尊古齋古玉圖錄』の方が目に觸れる機会は多くなつた。⁽²⁰⁾

いま、この清華大學圖書館藏の『尊古齋古玉圖錄』と「民國二十八年一月」に刊行された『古玉圖錄初集』とを見比べてみると、確かに書名が異なるように幾つかの點で異なる。そもそも両書の「題簽」はそれぞれの書名「古玉圖錄初集」「尊古齋古玉圖錄」が題されていることからしても、明らかに別の圖錄である。しかし、内容面では類似した點や紛らわしい點が少なくないのも事実である。

類似しているのは、同じく尊古齋が収集した古玉の拓本を集めたものである。その器影に重なるところがある。ただ單純に全体の葉數だけを比較すると、『古玉圖錄初集』は四巻本で、補遺を含み全二百四葉であるのに対し、『尊古齋古玉圖錄』は不分卷ながら六冊本で全三百三十三葉であり、數量的には後者のほうが多い。

「題簽」について言えば、『古玉圖錄初集』は誰の筆になるのか署名がないが、『尊古齋古玉圖錄』には「志青、甲戌中秋」とある。「志



清華大學圖書館藏の各種「原拓稿本」。ただし、『鄴中片羽』一集・二集・三集と『古玉圖錄初集』はコロタイプ版であり、これを除く。

青」は馮汝珩の字であり、「甲戌」は民國二十三年（一九三四年）である。兩書にともにある傳增湘の序文は同文であり、執筆時期は「共和二十四年嘉平月」とあり、すなわち民國二十四年の十二月である。ただし舊曆で表記する傳增湘の習慣からすれば、實際は民國二十五年（一九三六年）に入っていたであろう。

問題は「題字」である。題字はともに容庚が書き、まったく同じ字體で「古玉圖錄四卷」とある。これは紀年こそないが、「四卷」とあるからには、『古玉圖錄初集』四卷本のために書かれたものであるに違いない。ところが、この容庚の題字は『尊古齋古玉圖錄』の清華大學藏本にも綴じ込んである。このことが、『尊古齋古玉圖錄』と『古玉圖錄初集』の成書の早晩を決めるのに少し複雑な事情を孕むこととなる。

ただ、同じ字體の「古玉圖錄四卷」ではあるものの、『古玉圖錄初集』は文字が墨書されているのに対し、『尊古齋古玉圖錄』（清華大學藏本）では文字の輪郭を双鉤法によって白抜きで書かれているという違いがある。容庚が始めから双鉤白抜きで書いたとは考えられないので、『古玉圖錄初集』では本来のままの墨書された原本をそのままコロタイプ版に寫して印刷し、『尊古齋古玉圖錄』に収録するときには両者を区別する必要もあって、黃伯川が敢えて双鉤白抜きにしたのではないか。『尊古齋造象拓本』でも帙の題簽（「尊古齋造象拓本」、題簽「造象集拓」、題字「造象集拓」（馮汝珩）が双鉤白抜きの字が使われており、黃伯川のこだわりを感じる。

清華大學藏『尊古齋古玉圖錄』が同館編『清華大學圖書館藏善本目錄』（清華大學出版社、二〇〇三年一月）において「手稿拓本」というのは、多くの拓本を切り取って貼りこんであつたり、版面を超える大きさのものは折り込んであつたりすることからも極めて明確である。また、紙も上質のものを使い、版框の中央の柱には上部に「古玉圖錄」、下部には「江夏黃氏審定」とあり、それを証明するかのように毎葉に伯川の各種の朱印が押されており、これを以て後世に残すという編者黃伯川の覚悟のようなものが傳わってくる。

そうした目で傳増湘の序文を見ると、清華本の『尊古齋古玉圖錄』では拓本の部分とは異なつた紙で、傳増湘が他のところでもよく用いている藏園特製の原稿用紙が用いられており、自筆の原稿と思われる。両者を対照して見較べてみると、全体の墨の色の鮮やかさも異なり、署名の後の朱印が『尊古齋古玉圖錄』では鮮明であるのに対し、それを転用したコロタイプ版の『古玉圖錄初集』の方はやや暗くなっている。重ねて言うことになるが、『尊古齋古玉圖錄』はコロタイプ版であれ、石印であれ、民國年間に出版されたこととはなく、いわば黃伯川の手元に置かれた手控であつたのではないかと思われる。

すなわちこの間の事情は、おそらく以下のようなことであつたのではないか。傳増湘の序文は、「共和二十四年」に本来は「尊古齋古玉圖錄」と記された馮汝玠の題簽とともに、『尊古齋古玉圖錄』のために書かれたものであつたが、『古玉圖錄初集』を出版すると

きに、これをコロタイプ版として影印して転用した。『古玉圖錄初集』が刊行されたのは「民國二十八年一月」であり、馮汝玠の題簽「尊古齋古玉圖錄」や傳増湘の序文が書かれた「民國二十四年」とは數年の時間差があるのはそのためである。馮汝玠であれ、傳増湘であれ、彼らが編纂されたものを見ることなく、題簽や序文を書くことを承諾したとは考えられない。ただ谷庚の「古玉圖錄四卷」という題字と題簽は、『古玉圖錄初集』を出版する時に改めて依頼して書かれたのであろう。

『古玉圖錄初集』を出版するときに「初集」と題したのは、おそらく黃伯川は『尊古齋古玉圖錄』を一種の種本として、そこから選んだものを「初集」に始まり、順次「二集」「三集」として出そうと考えたのであろうが、結局は「初集」にわずか三葉の「補遺」をつけたものだけで終わった。残された『尊古齋古玉圖錄』は未刊のままに黃伯川の手元に「原拓稿本」として残され、やがて清華大學圖書館の所藏に歸したということではなかつたか。⁽²¹⁾『尊古齋古玉圖錄』は刊行されたものではないので、當然出版物にある奥附にあたる刊記はなく、各ページの葉数の表示もない。

本稿の表題を「傳増湘の古玉研究——『古玉圖錄初集』序」とせずに、「傳増湘の古玉研究——『尊古齋古玉圖錄』序」としたのは、この傳増湘の序文が「民國二十八年一月」にコロタイプ版で世に出た『古玉圖錄初集』のために書かれたものではなく、『尊古齋古玉圖錄』のために書かれたものであると考えたからである。傳増湘が

序文で「藝術の美」をいうのも、『尊古齋古玉圖録』であるとすれば、十分に納得のできる言である。翻って『尊古齋古玉圖録』では毎葉にあった尊古齋の遊印は『古玉圖録初集』では第一葉を除いてすべて省かれており、黄伯川が意圖した「藝術の美」を十分に反映しているとは言い難い。まして縮尺された上海古籍出版社版『尊古齋古玉圖録』においてはなおさらである。傳増湘の序文がそれらを以て理解されたとすれば、傳増湘にとっても甚だ遺憾なことであるに違いない。あえてこの間の事情について觸れた所以である。

注

- (1) 尊古齋の黄興甫・黄伯川は民間の骨董商であつたこともあつて、まったく傳記は存在しない。多くは琉璃廠のことをよく知る古老の傳承や記憶に基づいたものであるが、その中で陳玉棟（字は重遠、一九二八年—二〇一〇年）の「陳重遠說琉璃廠」（北京出版社、二〇一五年五月）のシリーズにまとめられ諸篇に言及される尊古齋と黄伯川に關する幾つかの文章や寫真は大変興味深く傾聴に値する。尊古齋に關連する主なものに「尊古齋富于傳奇」（『琉璃廠文物地圖』）、「尊古齋的傳説」（『京城古玩行』）、「風雲人物——老古董商之略傳」（『京城古玩行』）、「金石學者和古董商的逸事趣聞」（『收藏逸話』）、「商代青銅山尊與中日兩大骨董商」（『金石談舊』）、「黄興甫出身之笑聞」（『琉璃廠老掌櫃』）などがある。また石朱「琉璃廠的古玩業」（中國人民政治協商會議北京市委員會文史資料研究委員會編『文史資料選編』第四十五輯、北京出版社、一九九二年十二月）。本稿でもこれらを参照した。

- (2) 黄澄の字を「百川」とすることは、上海古籍出版社が一九九〇年六月に「尊古齋集拓」という名で七種を影印出版した時にこれを採用しているが、

根拠は示されていない。注(1)に挙げた陳重遠「富于傳奇的尊古齋」「尊古齋的傳説」には、名の「澄」と關連付けて「疏通百川暢流不阻」が正しいのではないかとしているが、果たしてどうか。黄澄の孫女はこれを明確に否定して「百川」であつたといい、陳重遠も本文では「百川」と表記している。本稿でも最も通行している「百川」を取った。

- (3) 「衡齋金石識小錄序」「黄君伯川隱買、而刻意稽古無間。……余識君三載、君每得一物眎余。余所論者、十九與君合。其冥思嘿契、高鑑遠識、莫之尚已。」

- (4) 黄澄は清東陵の盜掘品の賣買に絡んで裁判にかけられて獄に入ること三年、民國一九年（一九三〇年）に釋放された後、その經營を子の黄金鑑と弟子の喬友声に譲ると、一切經營に關與せず、店名を通古齋と改め、一九五六年に公私合營となるまで續いた。注(1)所引「尊古齋的傳説」など参照。

- (5) この他にも、既見のものに、京都大學人文科學研究所圖書館には、東方文化研究所の舊藏本として、『金石彝器印存』（一冊本）、「尊古齋藏器」（六冊本）が所藏されている。前者はわずか二十葉の石印版の印影と器影を私的に集めた「零葉（零本）」に後に書名をつけたものである。後者には、泉屋博古館やバリのセルニスキ美術館に所藏される「虎卣」の器影が見えるが、刊記はなく、書名も後につけたと思われるものである。また、尊古齋自身の販売廣告や各種の辭典には次のような書名も見えるが、現時点では現物の所在を確認できていない。『尊古齋集印』全五集五十卷（東京國立博物館圖書館藏「古玉圖録初集」書帙廣告など）、『衡齋玉印徵』（韓天衡主編『中國篆刻大辭典』上海辭書出版社、二〇〇三年十一月）、『尊古齋古印拾零』（同前）など。

- (6) 東京國立博物館所藏の『古玉圖録初集』や東京大學東洋文化研究所藏の『尊古齋陶佛留真』の書帙内側には尊古齋の目録があり、そこでは「尊古齋古鏡集林」第一集は「原本」となっており、当初は「原鈐本」として出され、後に石印本として出されたと思われる。事情をよく知るはずの容庚

の『金石書目録』（商務印書館、一九三六年六月）には「民國二十二年石印本」とある。

(7) 注(1)所引「尊古齋富于傳奇」参照。

(8) 印璽が春秋戰國に始まるという漠然とした理解は、戰國時代の印璽の傳世、及び出土品が多かったこと、またおそらく謝肇淛の『五雜俎』卷十二物部に「三代之爲信者、符節而已、未有璽也。周礼九節、璽居一焉。璽亦所以爲節。鄭康成謂止用之貨賄、蓋亦用以鈐封、恐人之偽易也、称印而已」とあるのに據るのであろう。

從來『鄧中片羽』に著録される三枚の印璽はこれが収集品であることから、一部になお慎重な態度を取る研究者もいたが、一九九八年秋、安陽西郊の殷墟後期の地層から発掘された銅璽は、やや小ぶりながら同じ鈕にして印面も卽字形の框を持ち圖像もよく似ていたことから、『鄧中片羽』に著録されるものが間違いないものであることが確認された。李學勤「試說殷墟出土的銅璽」(『中國書畫』二〇〇四年第二期)参照。また、徐暢主編『先秦璽印』(『中國書法全集』九二「篆刻編」、榮寶齋出版社、二〇〇三年二月)には『鄧中片羽』の三枚の銅印璽が收録されている他にも一枚の印璽がある。なお、この三枚の印璽は現在台湾の故宮博物院に收蔵されている。

(9) 『鄧中片羽』三集に先立って、羅振玉の『貞松堂集古遺文』補遺卷上(一九三一年)『三代吉金文存』第六冊(羅氏百爵齋、一九三六年)にその銘文の拓本が示されている。器物の所蔵は尊古齋であったのである。

(10) 中國嘉德國際拍賣有限公司編『中國嘉德香港二〇一五秋圖錄・觀古——瓷器珍玩工藝品』(中國嘉德國際拍賣有限公司、二〇一五年九月)。

(11) 注(1)所掲「商代青銅山尊與中日兩大骨董商」(『金石談舊』など参照。筆者の調査した範囲では、『古玉圖錄初集』(東京國立博物館所蔵本)の帙の表には「Ancient Jade Tula」という英文の題簽が貼つてあり、また同様に『尊古齋陶佛留真』(東京大學東洋文化研究所蔵本)にも「Earthen Figures of Buddhism」とあるなど、黃伯川が販賣において外國人の顧客を

意識していたことは明らかである。なお中國國內の所蔵機關ではこうした英文の書簽の貼られているのを見たことがないので、これらは専ら外國向けのものに貼られたものであろう。

(13) たとえば、陳重遠の「金石學者和古董商的逸事趣聞」(注(1)所掲)には金石學者と骨董商の交流が語られているが、それは金石学の方面ばかりでなく、書畫・陶磁器など様々な方面に及ぶ。

(14) この序文は、傅嘉年輯「藏園序跋」(『藝文志』第一輯、山西人民出版社、一九八三年二月、藝文志編纂委員會)にも收録されている。

(15) 薛尚功、生卒年未詳。字是用敏、錢唐の人。紹興年間に通直郎、定江軍節度判官廳事となるが、経歴は不詳。その著作『歷代鐘鼎彝器款識法帖』二十卷の明代の朱謀の木刻本を影印した容庚に「歷代鐘鼎彝器款識法帖述評」(中華書局、一九八三年八月再影印版所收)がある。畢良史については、明の李日華『六研齋筆記二筆』卷四(鳳凰出版社、二〇一〇年三月)に「少游京師、以買賣古器書畫之屬、出入貴人之門、當時謂之畢償賣。……良史通春秋、改京秩、栖遲輦下、人又號之畢古董」とある。

(16) 良渚文化・石家河文化の玉器は『尊古齋古玉圖錄』の三冊目に收録されている(同『圖錄』は葉数の記述がない)。「古玉圖錄初集」では、前者は卷二の第十四葉に、後者は卷二の第三十八頁と第三十九葉に收録されている。なお前者はこれに先んじて『衡齋藏見古玉圖』上卷第二十三葉にも收められている。

(17) その詩は「半壁崑山嶺、玉人追琢良。千年出鼠朴、丙夜射虹光。細理入毫髮、奇紋隱混芒。衡牙如飾歲、聲放中宮商。乾隆庚寅春(半壁は崑山の嶺、玉人は琢の良きを追う。千年鼠朴(璞)を出し、丙夜に虹光を射る。細理は毫髮を入れ、奇紋は混芒を隠す。衡牙は歳を飾るが如く、声は放たれ宮商に中つ。乾隆庚寅の春)。「乾隆庚寅」は乾隆三十五年(一七七〇年)。

(18) この『圖錄』ではないが、『鄧中片羽』三集に著録された百三十三點のうち青銅器一點だけは安陽殷墟のものでない(殷代のものでないという意味ではない)と判定できたのも、この圖錄がよく器物を寫していたからで

あろう。

- (19) 清華大學圖書館編『清華大學圖書館藏善本目錄』（清華大學出版社、二〇〇三年一月）には次のようにある。「尊古齋古玉圖錄不分卷」（民國）黃濬輯、民國二十四年江夏黃氏原拓稿本、六冊一函、傳增湘印。有民國二十四年傳增湘序」。

- (20) 上海古籍出版社は一九九〇年六月に清華大學圖書館に所藏される「原拓稿本」に基いて、『尊古齋金石集』、『尊古齋古代瓦當文字』、『尊古齋造像集拓』、『尊古齋陶佛留真集拓』、『尊古齋古兵精拓』、『尊古齋古玉圖錄』、『尊古齋歷代古鏡集影』を「尊古齋集拓」として影印出版した。このうち『陶佛留真』だけは民國二十六年五月にコロタイプ版で出版されている。「尊古齋集拓」數種はいずれも縮尺版で、一応の用は足るが、遺憾ながら「原拓稿本」と見較べると甚だしく遜色のあるのを免れ難い。傳增湘の「序」も收められているが、やはり縮小されており、序文も毎頁二行の前送りがあるなど、原型のままではない（縮小した器物があることは「出版説明」にあるが説明は甚だ不十分である）。墨の色が深く黒く艶のある「烏金拓」と、墨の色が淡い「蟬翼拓」の兩者を上手く使いこなし、これに朱印が押されているので、「原拓稿本」には傳增湘が「序」にいう「藝術の美」がある。「序」では黃伯川自身が拓本を取ったとあり、そのようなこともあったかもしれないが、注（一）所引の陳重遠「尊古齋富于傳奇」では尊古齋には譚という名人がいたという。また劉審『清華園里讀舊書』（岳麓書社、二〇〇六年）卷四「清華大學的古籍特藏」には「民國時期名拓手如周希丁等拓而成」とある。

- (21) 尊古齋の一連の「原拓稿本」が清華大學圖書館に收まった経緯についてはよくわからないが、いずれにも「國立清華大學圖書館」の印が押されており、これより判断して、一九四〇年代の後半ではないかと推測される。清華學校大學部が「國立」を冠して名乗るようになったのは一九二八年以降であるが、尊古齋の圖錄の編纂が一九三五年以降であること、一九三七年には北京大學、南開大學とともに西南聯合大學として昆明に移り、一九

四六年になってようやく北京に戻ったことなどを考え合わせると、一九四六年から四八年までの間ではなかったと考えられる。

* 本稿は平成26年—28年度科學研究費基盤研究（C）「傳增湘の古典學と傳記・詩文に關する基礎的研究」の成果報告の一部である。